

棲神 第二號

昭和十年十二月發行

新發見の聖傳資料

(口繪参照)

身延文庫藏古寫本

日進聖人仰之趣

嘉曆三年戊辰正月一日ノ御物語ト云フ也云々

(第一)

一 故老僧仰云 諸島、七金山ニ入ヌレハ
 金色ノハタエトナル 諸水ハ大海ニ入ヌレハ
 同鹹ノ味トナル 法花經廣宣流布ノ
 時ハ身延山ヘ參テ波木井河ヨリコナ
 タニ有ル砂ヲ取テ衣ニツ、ミテ返ルヘシ

(第二)

正月六日作也

一 日本國中ノ諸宗念佛眞言禪宗
 等皆無間亡國天魔ト云々 其ノ時キ導
 善ノ御房ヲ奉レ初メ數十人々セキ赤
 面ノヲハシマス 良キアテ導善御房
 聖人ヲツクノト御覽アテラレ(被以下同)レ仰セ

ケルハ道義御房ノ念佛シ無間ノ業
 歟 道義御房ハ清澄寺ノ近所也清
 澄寺ハ里ヨリ七里ヘタテヌル處也
 寺ヘ登テ四十年ノ間一日ニ念佛一萬
 返 阿彌陀經百卷ツ、讀玉フ也此ノ
 人ヲ生身ノ彌陀ノ如クニ人貴ミシ也
 聖人仰云 道義御房ハ一百卅六ノ地
 ヲ(獄)中ニ一底ナル無間地ヲ、底ニヲテ
 給フヘキ也 其ノ故ハ一人勝テ無間ノ業タル
 念佛ヲ申故也 其ノ時導善ノ御房ハ
 戸ヲタテ、内ヘ入リ玉フ也 數十人ノ人々モ
 ハラノト座ヲ立ツ也 其後安房上
 總ノ念佛者ト云百餘人同心ノ彌陀佛ノ
 敵ヨト、テ夜打ニ寄テ打殺シマイラセ
 ント儀スル處ニツ子(ネ)ニ聖人ニ付ソイマイ

ラセシ義一房慈義房二人ノ御同
 ○(宿カ)此ノヨシヲ聖人ニ語リ申也其ノ故ニ
 夜打ヲノカレ玉フ也 其ノ後東條左
 衛門ニ所ヲヲハレ玉フ也

(第三)

一古老僧仰云 旁々懸ル敵有テ甲斐
 國南部ノ六郎ト云シ人ニ但一度見參ニ
 入タリシカ此ノ人ハ某ニタノマルヘキ人ト見タリ
 此ノ人ヲタノミ行ヘキ也トラレ仰時キ御弟
 子旦那御淀(淀)ハサル事ニテ候ヘトモ南部ノ
 六郎ハ深キ信者ニテハ候ハス 又鎌倉□□_{出ケヒ}
 人ニ大ナル者トトラレ知候若御大事ヤハ候ハ
 スラント云々 仰云 某カ見損シタラハカナ
 キ事但行候ヘキトラ仰ニ文永十
 一年五月十二日ニ鎌倉ヲ御出アテ

六日ニ南部ノ六郎（入御）アテ實長ニ
御見參アテ此ノ由ヲ御申アレハ實
長一度申タル事ヲスヘテヒルカヘ。○ヌ物ニテ
候トテ内（入レ）參テ八月彼岸ニ身延ノ澤ニ
御房ヲ御ツクリンシ也云々

（第四）

一九ヶ年ノ間身延ノ澤ニテ法花經ヲ讀誦ス
靈鷲山ニテハ佛小乘權教實教ヲ
并テ説キ玉ヒタリ 此身延山（但）法花
經計九ヶ年也 靈山ニモ恐ク可レ勝也
其ノ故法花經法師品ニ云佛ヲ一切ノ
ノ（供養カ）タルヨリモ法花經ノ行者ヲ一ノ惡言ヲ
以テノルハ其ノ罪深シトラレ説ク以テ之思
佛ノ靈山ニモ此ノ身延山（勝タル也）云々仰ノ分也

（第五）

一 折節廣（摩訶）一房ノ旦那ニ白拍子一人アリ
日進仰云廣訶一房ノ事ヲ申ハ上ニ

似トモ道理ニマカセテ申也此ノ御房ハ

道心者ト思フ候ヘハ多ノ相違アル也其ノ

廣訶一御房ノ師匠ハ智觀法橋ヲ故也

（以下一線モテ消サル）

智觀法橋ハ如法行學問アルカ又法

花信（以上消サル）智觀此ノ師ニヨリ本書ヨミ

學問アルカ又法花ヲ信スモ智觀法

橋カ故也 智觀法橋ハ如法行ヲコナ

ヘハ惡師也惡師ヲ捨テ、善師ニ付クハ

正義也ト云也大國阿闍梨御房越

後ニテ如法行ヲコナイ給（惡師

也ト云也其ノ上古老僧（參テ誓狀

申テ御弟子ニナルヘキヨシ申テアリシカ

其ノ義コソナ。ラメ 又結句御入滅ノ時鎌

倉ニ有リシカ一度訪ニマイラヌハ佛法者ト云

ヘキ歟 又御墓ヘ參ラヌ事ヲ申ハ佛法弘

通ニヒマナシト申カ 言ト振舞ト相違スル也其ノ

上越後ヘ十餘日ノ道也ソレヲ行キ道ナリ

鎌倉ヨリ三日有ル處ヘ參ラヌハ先師御墓ノ

向背ノ人ニ非ト云ヘキ歟 又越後ヨリ本大□トヒ

云者ノ十余日ノ道ヲカキタテ、先鎌倉ヘ參

又御墓ヘ參シトセシヲヲシト、メテ不參ラ大

罪ニアラスヤ我身コソ弘通ニヒマナクトモ弟

子旦那等ヲハス、メテコソ參ラスヘキニ結

句參人ノ錢ヲ取テ弘通ノサシ合ニセヨトテ

人ヲマイラセヌハ弘通者ト可申歟 不法無申計也

(第六)

一 上野白蓮阿御房、本ト身延澤ノ爲シ

レ主古老僧ヲタノミ參テ學文ヲシテ

主ト學頭ト二人日圓ノ御時アリシ也

云々白蓮阿御房、實ニ爲レシ主ト聖人

ヨリノ付屬也ト云々 上人ノ付屬ニモ非又

日圓ノ付屬ニモ非ス 但我ニクレヨトアリシ

日圓ノ義ニ御定ヘ爾ナレトモ基ヘ聖人ノ

御時キ師ニハ學匠シマイラセウト申時キ

民部阿闍梨蒙レ仰也時ニ叶間敷

ヨシラレ仰タリ 大ニ御腹ヲ立サラハ民

部阿闍梨御房ヘ上總ヘ御返リ有テ

御弘通候ヘト云々 實ニ白蓮阿日圓モ師弟ノ

契約ヘ無己記請文ヲ以テ 古老僧ト、

師弟ノ契約ヘ一通有ルナリ 師ノ禮儀狀モ有之也云々

(第七)

一 聖人ノ物作ヘ講坊ノアトニ田ノ廣サ圓ク

タ、ミ四五帖シキ代ニ波木井殿ヨリ

苗ヲ百把御コイアレハ無相違ニ百把マイ
リタリ其苗ヲ老僧連ヲサウトメ

ニメウタヲウタエナト、ら仰ウエサ
セ給ヒケル也 其後田ノコエニ何^カ吉^トら

レ仰何^カ吉^ト申 御料ノワケ酒其ノ外萬ノ

物ヲ御入アレハ此ノ田ノ吉事無限^ニ也百

把ノ苗ヲハソノ十把斗^リ御殖^植アリシ

カ此ノ田ニテハ何程物ヲ取ヘキト^ラレ仰

ケルニ正直ニ少一二斗モ取ヘキト申セハ御

書訂^{一字アリ}腹立アル也我^カ物ヲコソワヒメ人ノ物ニテ

佗事スルハト^ラレ仰也 其後多^ク取ヘキ

ヨシ申^キ御悅アリケル也 其後此ノ

田ニテ粃^ニ斗ハカリ取^ル也 次郎太郎

入道^カモトヘヤリ入^テコナシテ聖人ノ仰云

此ノ物ニテ秋事^セトテ波木井殿ヲ御ヨ

ヒアル也此ノ粃ノ上ニ二三貫文入^テ物作
初ノナレハ秋事也トテ御語アリケル也云々

(第八)

一聖人仰云 老僧連サムキト^ラ仰ケル

時ハサムクハキル物ヲヌイテ水ヲアヒヨト云々

(第九)

一聖人マメ麥アハ時ニ隨^テ老僧連ニア

テ、^{一字不明}□ノ上ニ二三本四五本、植サセ給ヒケル也

(第十)

一古老僧徳用ノ事アル時山城二郎殿へ

云人下山ノ六日市場ヨリ酒ニヨウテ身延へ

參ラレケルカ杉山カケヨリ踏^{フミ}ハツシテ下へ

落ケルカ中程ノ藤ニカ、リテツルサレテ

居タリヨハワレトモ人キカス上人身延

澤ニテ聞シメシテアレタスケヨ山城次

郎^カ杉山カケヨリヲチテ藤ニカ、リ有^キ也

タスケヨトラ^ル仰 見レハ如案^ニ仰^ニ少^モ不達

也不思議也^{云々}

(第十一)

一 極月ノ事ナルニ 多ノ老僧若輩タチ

二三日マテ飢^テ御渡^リ有^ルニ上人ノ御定^ニ誑^ニ殿

原連何^カホシキ子^ニネ^ニカイ物セヨトラ仰^ニ也

面々^ニ有人^ハ酒有人^ハ餅有人^ハ飯ナト、願^ヒ

給也上人仰^ニ サラハ殿原連釜アラ

イハシヲケツリ玉ヘト^{云々} 有僧ら申^ニ二三日

飢デカナシキニハシカケ釜アラエナト、

らト仰ツブヤキ事シ玉ヘトモ隨仰^ニ也然^ニ宵^ニ

打スキ^ニ和^ノ泉^ノ阿闍梨其ノ時^ハ甲斐

國河口^ニアリ馬一疋^ニ荷一駄負^テ參^テ

物申候^ヘト申時^キ タソト問^ヘ 日法參^テ候^ト

ら申^ニシ時老僧連手ヲ打^テアラウレシ

ヤト^{云々} 荷物ヲ見レハ種々ノ子カイ物アリ

聖人御定^ニ今何^シニ來玉フヤト^{云々} 年ノヲハリ

ナレハ薪料持^テ參^ル也ト^{云々} 其ノ時上人

殿原連クヘヨトラ仰^ニ也^{云々}

(第十二)

一 老僧連上人ノ御時ノ御行ノ事 種々ノ^{虫クヒ}行^カ

中^ニ高所^ノ石^ヲ平^メ 又山^ハ入リ木ヲコリナ^ラ

コリ水ヲクミ物ヲツキ様々ノ御行無申

斗^ニ其ノ中^ニモ山^ハ入^テ木ヲコリ負^テ歸^ニモ

要文ヲ手^ニ持^テ誦^シ玉ヘハ參^ル人サテ身

延山^ハ貴^キ山かな木ヲコリ薪拾下法師

マテモ要文ナト誦^シナトスルニサソ僧連ノ

行貴^トカルラン^{云々} ト云ヘハ有^ル者^ハアラヲソロ

シヤアレコソ老僧連ヨ^{云々}

(第十三)

一 聖人、天ノ御爲ニ番々ツモツテ老僧連ニ御經ヲ

讀セ玉フニハヤク來^ル者ヲヘニクシトヲソクヨメトラレ

仰也云々

(第十四)

一 正月ノ儀式種々ノ讀誦不可稱シ計ス

別ニ有之^ニ何^モ御影御前ニテ御酒給テ御

返^リアル也 其後御影供ニ饌參ル

也一饌ハスヘノ饌一饌ハ喰 又上様御入

アテ我ト御饌ヲマイラセ玉フ也御カヨ

ウ人ハ二位殿少貳殿石見殿御茶ニハ

大郎三郎殿コン^ライ殿其ノ余ノ僧侶

アマタアリ其後御房ニ御歸^リアル也云々

是ハ進上人ノ御時ノ事也聖人御入滅ノ後

衛門大夫ノ義ニ今末法ニハ佛ノ舍利ヨリナラ

大切ニ貴キ事ナレハ幸ニ是ハ入御ノ事ナレハ此ノ御
骨ヲ安置申御墓ヲモツキ塔ヲモ立申

ヘシト云々 其時六人ノ老僧連一同ニ何ニ此ハ聖

人ノ御命ヲ違ル、ヲ身延澤ハ入^レ參セヨト御

定也ト云々 イカニ仰セ候トモ身延澤ハ

入參スマシク候タ、是ニテ申セシカハ大黒

阿闍梨御房天竺ニテモ佛御入滅時キ

八國ノ大王ノ佛ノ御舍利ヲ諍^テ軍ヲセントア

リシカハ有^ル賢人中ハ入^テ佛ハ慈悲深ク

渡^ラセ玉ヒシニ御舍利ヲ諍^テ軍ヲスルナラハ

佛ノ命ニ背^キ返^テ無間ニ墮^ツ申セシカハサ

ラハトモハカラエトテ御舍利ヲハニ分^テハ

處ハ送^テ塔ヲ立^テリト云々 雖然ニ是ハ正聖人

御遺言ニ既ニ南部ノ六郎殿ハ契約也只

此ニ留^メ申サントハ我等ト軍ヲセントヤイカニ

有リトモ軍ヘスヘカラス又何ニ御墓ラ立ニ

タリトモ我等ヘカケヲサスマシ只身延參ヲ

御墓ヲ立テ 御邊ヘ聖人ノ御命ニ達人ナレハ

無間地獄ヘ無疑ニ云々 其時衛門大夫所詮

御骨ヲ諍ヒ申モ爲後生ノ也聖人ノ御命ニ

可達ニテ候ヘハ但身延山ヘ急入ニ參セ

サセ給フヘシトテ一粒モト、メ申サス身延山ヘ

老僧老若輩若殿原ニ牧田富田?

二人御伴申身延澤ヘ參リ百日ノ間面

々ニ御經讀ニ御墓ヲ作立マイラセ給也

(第十五)

一 御本尊相傳ニ付テ何事ヤラン

仰云學文スルニハ其ノ方ヲ知ルヘジ不審ナル事ヲ

申ノ其ノ答ヲ能ク心得ニ 又重不審アリトモ

時ヲヘタテ日ヲヘタテ、可申也 即時ニ申尾?

籠也師ノ御意ニ背ヘ七逆罪也又大事ノ法

門ヲ問ヒ申ニ一度ニカナハストモ其ノ師ヲウラミ退

轉ス事ナカレ能々意入テ問ヒ可申也其例

無ニ非ス佛教分明也迹門ニ三請四止本門ニハ

三誠四請是也世間佛法ヲキテ分明也

可知之ニ心アサク問テヤカテヲシウルハ冥

驗難計ニ不答ヘ無慈悲也難計ニ云々

(第十六)

一 四條金吾法花經故ニ身命捨ル事

大難ニ二度所領ヲメサル、事二度也聖人

佐渡國御座ノ内ニ初度ノ參ノ時江馬殿ニ

大事ノ事アリケルフリステ、佐渡國ヘ參シ時キ

中ノハウ輩トモ申君ノ御大事ヲハアルヲ

佐渡國ヘ佛法ヲ持テテ行事不得意也ト

申カハ主ノ江馬殿後ニ御邊ニ息ヲスルハ自

然ノ世ニアワセウ爲也佐渡ヘハシリ候事

不得意ニ也金吾其ノ時候ヲ御大事ニ合トモ

ソレハ今生一タンノ事也後世ノ爲ニ非キタトイ

所領ヲメサル、共全ク後生ニハカヘマシク候トテ

又其ノ夜ノ内ニ佐渡ノ國(參給也ナラ傍輩

江馬殿ニ此由ヲ申セハ御眼ニ涙ヲナカシ申是ソ

主ノ一大事ニ立ヘキ侍ヨトラレ仰一人々シラケテ見、

ケリト云々

(第十七)

一 四條金吾殿ニ二度目ニ佐渡國(參ヒラレ

タル時聖人ノ御定ニ汝ヲハ山堂律師(日

本一番ノ相人ナルカ廿五ニ可死云ヘトモ佛法力ニテ

七十迄生ヘシトラ仰御酒ヲタブノト御ヒ

カヘアテ上ヲスツトキコシ。又御ヒカヘアテ

汝ノメト御定アツテ給也サテハ七十ニテ

生ヘシトヨル所ニテハ下人等ニ至ルマテ我ガ殿ヘ七十

マテ

生給ヘシト申セハ少モタカハス滿七十ニ生ズラ也

(第十八)

一 江馬殿儀ニ背キ佐渡國(參ラス事二

度也 二度目ノ時ヘ廿七歳トヤラン結句ザイ

クワコソナカラメ信濃國イカラノ庄之内

トノ岡五百貫文ノ地ヲ江馬殿ヨリ給也

聖人ノ龍ノ口ノ御難ノ御時ヘ四條金吾殿(廿七也

雜々集書之畢ヌ

天文第二卯月九日夜之

丑(丑)尅計書之寫シ畢ス前に

書候へとも惡キ間書直し申候

是とてもや同事 乞願者

酬(酬)此功德天下廣宣流布祈

成就^レ將亦學文増進^シ二世之

願令成就畢^ヌ師父母乃至

自他俱安同歸常寂而已

後覽旁々三説超過之眞

文一返可有御廻向者也^{云々}

雖然日域無双之惡筆

以^テ志之心地^ヲ如斯書之

訖了^ヌ

新發見の聖傳資料に就て

今讀者の便をはかり、いさゝか注解をなしてをく。尙口繪説明參照のこと

「身延山史」によると、日進上人は諱は三位公、大進阿闍梨と呼ぶ。初日心、中頃は眞に作り、終進に作る。俗姓清原氏皇后宮大進清原眞人行清の後胤、下總東葛飾郡大柏村宇大野に曾谷次郎兵衛尉教信入道法蓮の第二男として文永八年に生る。父法蓮は祖父に背きて宗祖に歸し、師亦幼にして祖門に投じ稚髮染衣、十二才の時宗祖の滅に値ふ。後叡山に遊學され、四十三才（正和二年祖滅卅二年）向師退藏のあとを承けて身延山第三世となる。緇素德に懷き、山色繁榮す。即ち翌三年中山の祐師登山し聖廟を拜し以後毎歲登詣、進上に師資の禮をとり、中山を以て身延の末寺となし、已來約六十年交誼を續くといふ。なほ師は中山・眞間諸山の開眼開堂等の式に招待せられ其導師を務めらるゝと傳ふ。又身延山の堂塔にしても、大聖御在世中は、十間四面の御房なりしも、師の代に至つて本堂已下諸堂伽藍の整備を見、中山の檀那六浦妙法の二王門建立・市川村の檀那の鐘樓建立等も師の代にかゝる。

師は在位十七年、元徳二年退藏せらる。此の「仰之趣」は退藏の前々年（嘉暦三年世壽五十八才）である。

第一の「故老僧」は向師を指すか。當時の身延の神聖な抱負がうかどはれ、趣味深い物語である。（第一）等は便宜上私に入る。

第二、は大聖人の諸宗折伏建長開宗の説法とも見えるが、或は文永元年、華房蓮花寺に於ての御諫ではなからうかとも思はれるが、多分は開宗當時の説法のやうである。就中、道義房がことは念佛の信者として明かであるが、淨顯・義淨に當る人と思はれるのが、茲では、慈義房義一房となつてゐる。更に究明すべき点である。

第三、は身延御入山の始末が簡單に記されてゐるが、聖語意味深長に拜せらる。但「八月彼岸に身延の澤に御房を御つくりし也」とあるのは通説と稍異つてゐる、更詳。

第五、摩訶一房とは、朗門九老の一、越後國朝倉高安の子、文永元年生（進師より七才の上）初天台の僧となり、偶鎌倉を過りて朗師の摩訶止觀第一の講をきゝてその門に歸す。仍て摩訶一院（又摩訶一阿闍梨）日印と稱す。文保元應の頃（祖滅卅七八年）鎌倉殿中で諸宗と角論して宗名を揚ぐ。元享元年（祖滅四十年）頃より獨立の志を懷き、嘉暦元年には越後に本成寺を創す。（本成寺派、今の法華宗）白拍子とは當時の藝妓である。又「如法行」といふは當時、天台宗の法花經五種供養十種供養の法式かと思はれる、更詳。こゝには日印師の對身延の非道が暴露攻撃されてゐる。第一第四と併せ讀み、中山祐上の事蹟と對考するとき、進上の祖廟護持の意氣に燃えてゐる當時の祖山の權威をうかどふことが出來よう。

第六、は富士興師と向師、波木井氏等の間の對談往復の模様が記されてゐるが、是亦、文簡にして實際事情は後日の研究にまつべきであらう。

第七、は六老畑の由來ともいふべくこれには田作のことであるが、大聖人は漁村出身でをはずから、田作には甚だうとかつたことが、微笑まれる。就中收穫の多寡を御訊ねになつて御立腹されたといふのは、この文だけではその眞意を把握できないやうである。又「次郎大郎」とは誰か、又「秋事す」とは何か、更詳。

第八、には大聖人の剛健さが拜され、

第九、には六老畑のこと、

第十、には大聖人の不思議な通力がうかどはれる。山城二郎とは誰か、更詳。杉山とは下山道、西谷より一里近くにある。

第十一、は之は何年の事か不明であるが、當時聖庵の貧しき有様がひしと迫る、實感靈活を覺える。然もこの艱境に處する大聖人の悠然たる御態度とそして衆人の生命をあづかられる憂心配慮、とが生き／＼とあふれてゐる。なかなか得難い好逸話であるまいか。

第十二、是亦、大聖の門弟奉仕の實際であり、給仕第一の涙ぐましい如實の消息。

第十三、是は大聖人御讀經に關する御誠めで深く憶念すべき一條である。

第十四、これは進上、正月會の行事を傳へた一文獻、よく究明すべき点がある。「聖人御入滅後」以下は「一」として改行獨立すべき一條であるが、今は寫本のまゝに掲げをく。之は大聖人の御舍利身延奉安に關する一挿話。牧田、富田といふ人々も更考。

第十五、學事に對する慎重敬虔な古風が示されてゐる。これは進上の仰かと思はれるが、やはり大聖直傳の精神であらう。

第十六、四條金吾氏の佐渡へ二度も御訪問申した所、主人江馬氏に對する態度、又大法に對する覺悟のことがうかゞはれる。尙江馬氏も自身では四條氏を愛重信賴されてゐた賢主であつたことが知られると同時に、四條氏が後年龍象房のことから勘當されるに至つたのは、良觀房等の暗策讒言に因ること甚だ大であらうと信ぜられる。

第十七、の觀相、壽命のことも興味深い話である。山堂律師は今不明。因みに四條氏は、大聖葬送には池上宗仲氏とともに幡を捧げ奉り、後入道して收玄日頼といひ、その所領たる甲州内船に隱居し、正安二年（祖滅廿七年）三月十五日寂す。世壽七十三。

次に奥書の天文二年は、嘉曆三年より二百〇六年に當る。筆者の「本化末流、舊聖」はいかなる人か「心市」といふは同人の様であるが、更詳。

以上は聖傳資料としても、輕々に看過できない由緒をもつと思ふ。例せば朝師の元祖化導記にも増して、古色ある確實なるもので、「化導記」中に引用されてゐる或記即ち向師の「行狀日記」にも比すべきものと思ふ。珍しい話題、生き生きした大聖の日常御生活も有難い。幾多、聖傳に異説をも投じ、同時に資料をも呈供するであらう。願くは更に先匠、後賢の研鑽をまつことを。

— 昭和十、十、廿二、室佳記 —